そこで，今回，学校看護婦の再教育として文部省が実施した「全國學校看護婦講習會」について講習者の資格・開催場所・講習科目及び講師・講習期間等を明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ．

結果，講習資格者は，第1回目は①現在學校看護婦トシテ勤務セル者，②兒童保護事業ニ從事セル看護婦及其他ノ婦人，③日本赤十字社ノ看護婦，④一般看護婦ニシテ將來學校看護婦タラントノ希望アル者，⑤女子教職員，⑥都道府縣市町村ノ教育關係吏員であったが，第2回目以降は⑥が削除されていた．開催回数は1年に1回であった．講習期間は，第1回目～第7回目までは7日間であったが，第8回目は6日間，第9回目は5日間，第10回目と第11回目は4日間と次第に短くなっていった．また，開催場所は第1回目～第4回目は東京女子高等師範學校，第5回目～第8回目と第10回目は日本赤十字社，第9回目は大阪帝國大學醫學部講堂，第11回目は九州帝國大学醫學部講堂であった．その他第8回目では東京帝國大學醫學部講堂，體育研究所も開催場所になっていた．

講習科目は，第1回目は「學校衞生ノ大要」，「學校教育ノ大要」，「學校看護婦ノ執務」，「救急處置」，「學校眼科」，「學校齒科」，「學校傳染病」の7科目であったが，第2回目には「身體檢査」，「學校ニ於テ特ニ注意スヘキ疾病異常」が追加されているが，「學校齒科」が削除されている等の変更がなされていた．しかし，「學校看護婦執務指針」や「學校看護婦職務規程」，さらには1929（昭和4）年に文部省訓令として出された「學校看護婦ニ關スル件」に規定された職務内容を実践するために必要な知識の修得を目的に講習科目が設定されていた．

講師は，「文部省學校衞生官」，「文部省督學官」，「地方視學官」，「日本赤十字社病院醫師」，「體育研究所技師」，「榮養研究所技師」，「帝國大学醫學部教授」，「聖路加女子専門學校教授」，「齒科醫學專門學校教授」，「小學校校長」等であったことが明らかになった．

学校看護婦の再教育である「全國學校看護婦講習會」は，学校看護婦の増加と社会背景の変化に伴い，既習の内容では不足している学校衞生に関する知識・技術の修得を目的に開催されたと考える．

文献

1）大日本私立衞生會雜誌；第306号，p. 570, 1908.
2）文部大臣官房衞生課編；學校看護婦ニ關スル調査，文部大臣官房衞生課，48, 1925.
3）文部省體育課；學校看護婦ノ執務指針，養護，1(1), 15–24, 1928.
4）學校衞生，5(7), 413–415, 1925.
5）文部大臣官房文書課編；日本帝國文部省第51年報上巻，文部大臣官房文書課，8–9, 1927.
6）杉浦守邦：養護教員の歴史，東山書房，151–152, 1974.
7）近藤真庸；養護教諭成立史の研究，大修館書店，75–76, 2003.
8）同上7)，112–114.
9）日本学校保健会編；学校保健百年史，第一法規出版，137, 1973.

（平成28年12月六史学会合同例会）

書　評

香月牛山 原著，中村節子 翻刻・訳注
『小児必用養育草――よみがえる育児の名著――』

翻刻者の中村節子氏は看護職（助産師・看護師）で，看護史研究会に所属する看護歴史家である．看護専門学校教員を定年後，ボランティアで地域の「子育て支援活動」に参加し，現代の若者たちの子育てを支援する立場にいて，子育てのありかたに関心を持ったようである．中村氏は

2012年に香月牛山『老人必用養草』の翻刻・訳注の書を出版され，今回の『小児必用養育草』はその4年後に著された，牛山の養生3部作のうちの2冊目である．

中村氏は序において，本書を翻刻した理由として，①貝原益軒が小児の保養に関しては牛山の養草を推奨していること，②江戸期の代表的育児書で後世に与えた影響が大きいこと，③これまでに2度翻刻されているが，現代文に訳したものはないこと，④江戸時代の育児書には訓育系と医療系の2系統があるが『小児必用養育草』は両方を含む育児書としての価値があること，の4点をあげている．

第1巻は小児養育総論，2巻は小児の養育・小児の諸病，3巻は第2巻の小児の諸病の続き，第4・5巻は痘瘡の症状・治療・看護，第6巻は小児の発育と遊び，教育となっている．

本書は元禄16（1703）年序，正徳4（1714）年の刊行である．牛山47歳の時の著作で，当時小児がおろそかに扱われていることを憂い，平易な仮名書きで漢字にはふりがなをつけ，庶民が読みやすいように工夫した小児の保健・療養の書である．牛山にはいくつか名前があるが，本書のなかでは自分のことは字（あざな）である啓益で記している．

本書を読んでいてまず驚くのは明・宋・元時代の中国の小児系医書からの病名，症状，処方などの，引用・参考にした箇所が多いことである．後世派に学んだ牛山の医学的知識の高さが窺われる．それらの医書，著者には訳注が付されている．そして実際に処方し効果があった処方は「験（しるし）あり」と記して公開し，複雑で説明できないが効果のある処方は秘法である，としている．

儒医である牛山が四書五経に精通しているのは当然であろうが，それ以外に日本の歴史書である『日本書紀』，『類聚国史』，ほかに『万葉集』や『源氏物語』，『続古事談』，『小笠原家諸礼書』などから小児に関する部分を引用しており，牛山の幅広い知識が窺われる．『老人必用養草』にも『枕草子』の逸話が引用されており，牛山は専門の医学書のほかに日本の歴史書や古典文学などを読んでいる．

牛山はまた，仏教書の『法苑珠林』を読んだことがあり，そのなかに小児の疾患と治療法が記されていたことが参考になったと述べ，「医師（いし）たらん者は，見聞広（けんぶんひろ）ければ其益多（そきおほ）き事なり」（巻二末尾）と記している．このことは医療者全体に共通することである．

小児にとって乳母となる女性は実母と同じくらいに重要な存在であるが，乳母になる女性の人柄や健康状態，知識レベルなどその資質について詳述している．これらは中国の医書からの引用が多いが，乳母の重要性を説いており興味深い．また障害児の養育についての記述もある．

江戸期に小児の死亡率が高かった痘瘡については4巻と5巻を当て，重要視していることがわかる．近年，小児看護学領域の看護職が江戸期の『小児必用養育草』に関心を持ち，4回シリーズで看護専門雑誌『小児看護』（2012）に子供の誕生，産湯と授乳，乳母と産着，乳幼児の育て方を掲載した．しかし，痘瘡の看護は取り上げられていない．現在は撲滅された疾患であり，必要性を感じなかったためであろう．

この4・5巻について中村氏は，看護史研究会の研究誌『看護歴史研究』第8号（2016）に「香月牛山『小児必用養育草』にみる痘瘡の看護」として報告している．痘瘡は今日では撲滅したがここで牛山が記している，症状の丁寧な観察，そして細かな看病法は今日においては環境の調整，体力の保持，ストレスの軽減の3つにまとめられるもので，現在の感染症においても共通の看護のポイントといえるのである．またこれらの看病のポイントは19世紀ナイチンゲールの『看護覚え書き』に記載されている看護のポイントとも共通するものがある．さらに「看病人」という用語が，痘瘡の看病のところに2回使用されていることも興味深い．牛山がここでのみ使用しているということは，看病人の力が医学的に痘瘡（病気）の回復を大きく左右すると考えているからであろう．

一方，「痘瘡収靨（いもかせ）の後，米泔水（こめのとぎしる）の湯にて浴（ゆあみ）するの説」のところでは「米泔水（こめのとひしる）に酒（さけ）少しばかりを加（くは）え，或は鼠（ねずみ）の糞（ふん）二つばかり入れて沸湯となして，その湯にて痘を洗（あら）い沐浴（もくよく）すれば痘よくかせ

て，病者（びゃうしゃ）こころよきにいたるなり．これを酒湯（さかゆ）といふ」（巻五）とあり，迷信的なところも一部残っている．

最後に本書の出版には，中村氏による牛山の2著の訳注に協力を惜しまなかった農文協の編集者，泉博幸氏の存在がある．泉氏は『安藤昌益全集』（全21巻）の訳注も手掛けており，古文・漢文，江戸時代の民俗や医学にも詳しく，看護史研究会で発刊した平野重誠『病家須知』の翻刻のときにも協力していただいた．本書の定価は1600円，限定300部とのことである．

（平尾真智子）

［農山漁村文化協会，〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1，TEL. 03（3585）1141（代表），2016年3月，A5判，248頁，1,728円（税込）］

吉元昭治 著
『内経・神農本草経 分析』

今回，日本医史学会で長年活躍されている吉元昭治先生が標記の書を上梓された．同じ中国伝統医学に興味を持つものとして，本書の紹介ならびにデータベースとしての感想を述べさせていただき，その責務をはたしたいと思う．

当然のことながら伝統医学のベースになっているのは，古典文献である．鍼灸で言えば『内経』（素問・霊枢）『難経』，湯液で言えば『傷寒論』『金匱要略』『神農本草経』である．いずれも難解であり簡単に理解しえるものではない．古典の解説書としては，現代語訳の意釈，新釈シリーズ（小曽戸丈夫，小曽戸洋）などで，その理解は容易になってきた感はあるが，本格的に伝統医学を臨床応用しようと思えば古典は高いハードルである．

本書の書名にある「分析」というタイトルは，興味津々であった．本書は『内経』『神農本草経』の註解本ではない．また古典の一字索引，章句索引，用語索引でもない．『内経』『神農本草経』の複雑，煩雑な部分，特に医学基礎理論の部分を分解，整理，再構築した「分析」に重点を置いた，今までに無い本である．

本書の内容は『内経』の（1）表解，（2）成句分類，（3）分解，さらに『神農本草経』の（4）表解という四部構成になっている．

「表解」とは，『素問』『霊枢』『神農本草経』の各論編の内容を〈表形式〉にまとめ整理したもの．具体的には，『素問』の上古天真論 第1では，表①として，男女分け，年齢分け，成長の内容を一覧の表にしてある．四気調神大論 第2では，表②として，春夏秋冬の四季の気候の変化と疾病予防の表である．以下『素問』では94の表，『霊枢』では196の表が収められている．

「表解」は，各論編ごとに天地人，陰陽，身体，臓腑，四季，東西南北などの古典用語の基礎的な内容を簡単明瞭に表にしたサブノートのようなものであるが，思考を整理するには極めて有効な手段である．

また「表解分類一覧表」というページを設け，表解部分を項目ごとに分類整理し一覧にした表がある（『素問』38項目，『霊枢』42項目）．これにより，基礎医学のキーワード，例えば「陰陽」は，表⑤⑥⑦⑧⑨⑪……等とあり，原文の参照が用意である．項目索引のように作られていて，この整理方法は古典の整理分類のアイデアとして大いに参考にすべきと感じた．

「成句分類」とは，成句（章句，熟語，フレーズ）をまとめた分類である．本書では40の成句が紹介されている．具体的な例で言えば，「百病」という成句に対して，

「風者百病之始」（『素問』生気通天論 第3）
「風者百病之長也」（『素問』玉機真蔵論 第19）
……，
「百病之始期也，必生于風雨寒暑」（『霊枢』五変 第46）

等など「百病」に関する成句を11例，抽出整理し